

第5回みなまた地域創生ビジョン研究会

平成28年8月1日（月）

【岩橋室長】 それでは、ただいまから「みなまた地域創生ビジョン研究会」第5回会合を開会させていただきます。委員の皆様方には、大変お忙しい中、お集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

まず、本日の研究会の出席状況ですが、全委員数8名のうち7名の委員が出席されています。

次に、資料の確認と取り扱いについて、ご説明いたします。

お手元のダブルクリップでとめてある資料でございますが、まず、議事次第、1枚めくっていただき、資料の1「委員名簿」、めくっていただきまして、資料の2「第4回の意見の概要」、こちらは7ページまでございます。その後、資料の3「めざす地域社会像等について」、1枚めくっていただき、資料の4「用語の定義」、2枚めくっていただき、資料の5「3世代育み健やかタウンを実現するための手段（施策例）」をお配りしております。資料と参考資料には、右上に四角の枠囲みでそれぞれ表示をしておりますので、そこを見ていただくと開きやすいかと思えます。また、資料ごとに左上をホチキスでとめまして、ページ番号は資料ごとにつけております。一つ一つ資料をご確認いただき、もし不足している場合にはお申しつけください。

本日の資料やご意見等につきましては、原則全て公開とし、後日、発言者名を示した議事録を各委員にご確認いただいた上で公開させていただきます。

それでは、この後の議事進行につきましては、永松座長にお願いいたします。

【永松座長】 皆さん、こんにちは。

早速、議事に入りたいと思いますけれども、本日は、皆さんにご議論いただくことが大きく二つございます。その前に、まずは、前回の意見の概要とこれまでの経緯、そして今後の予定について、簡単に事務局から説明をいただき、確認していただきます。その次に、今日の前半の議論として、目指す地域の社会像のコンセプトやビジョンまた用語の定義について、これは既に数回皆さんでご議論いただいたものを改めて事務局から説明していただきまして、今日はこれらについて決めたいと思っております。その後、後半は、そのビジョンを実現する具体的な手段、いろいろな施策や事業といったものについて、これも前

の会合等で説明いただいておりますが、改めて事務局から説明をいただき、委員の方々から、こういう施策はどうかといったアイデアを出していただく時間に充てたいと思っております。

それでは、まず初めに、資料2から、事務局に説明いただきたいと思います。

【岩橋室長】 それでは、資料の2をお開きください。

前回いただいたご意見を六つの点にまとめておりますので、それぞれ読み上げてまいります。

まず一つ目は、(仮称)3世代育み健やかタウンのコンセプト(案)の全体的なことについて、いただいたご意見です。

まず、牧迫委員から、冒頭に「例えば」とついていたのですが、これは、弱いのでなくてもいい。植木委員から、「水俣は」、未来につないでいくまちを「めざします」とストレートに入ってくるように、「水俣」を一番最初に持ってきたほうがいい。永松座長から、1文だと冗長感があるので2文にしてはどうか。また、冒頭か最後に「水俣」という言葉を入れることは皆さんにご了解いただけたと思う。藤本委員から、「みんな遊びにおいで」と、外にも開かれるイメージがあるといい。石原委員から、外に開かれるがゆえに、一般にきれいなところだけを見せていくことになる可能性がある。これらに対し、望月所長から、長いというご意見がありましたので、二つの文章にして、まず大きく目的を書き、次にその方法論を書きたいという対応策をお示ししています。

めくっていただきまして2ページです。二つ目は、コンセプト(案)の用語にあった「子ども・その親世代・高齢者」という三つの区分について、いただいたご意見です。

石原委員から、「その親世代」と、あえて「親」とする理由は何か。「子ども・大人・高齢者」としてはどうか。また、「その親世代」は、世代だから親でなくてもいいということではあるが、大人であることの意味を「親」というものに置き過ぎている。植木委員から、「その親世代」は、子どもとすぐつながるし、高齢者になると子育ても終わり単体で世帯として独立しているという感じもする。多少、親世代というものにフォーカスされていても、意図としてはあってもいい。永松座長から、一般に、子供、親、じいちゃん・ばあちゃんが3世代のもともとの意味だと思う。ただ、胎児のお話もされたので、正確に言うところだけではない。3世代としてまとめてもいいのではないかと、といったご意見や、用語の説明のところで補う形を事務局で再検討してくださいということがありました。そこで、一番下の矢印に書いておりますように、対応策として、事務局で再検討をすることにして

おります。

3ページに行きまして、三つ目は、コンセプト（案）の用語の中にあつた「みんなの健康」の括弧書き「心や体・社会的な健康」について、いただいたご意見です。

まず、牧迫委員から、例えば、「こころ・からだ・人とのつながり」のほうが、全体の「健やかに」や「いきいき」にマッチする印象を受けた。補足説明がつくのであれば、コンセプトの中に括弧書きは必要か。「心と体と社会的」は、日本語的に変な気がする。「身体的・精神的・社会的な」のほうがいい。石原委員から、「社会的な健康」を入れたことを高く評価している。水俣の特性を考えた場合、単に健康の値が悪いというだけではなく、社会的な関係性、社会的な健康の問題というのが典型的にあらわれた地域である。永松座長からは、補足説明をつける形で、事務局で整理をしてくださいということで、一番下に、対応策として、補足説明をつけて事務局で整理しております。

続いて、4ページに行きまして、コンセプト（案）のネーミング、「3世代育み健やかタウン」について、いただいたご意見です。

石原委員から、「健やか」と「育み」の位置をかえるともっといい。「健やかでないといけないのかというプレッシャーを感じる」という意見も聞く。〇〇タウンの〇〇は、状態ではなく行動を指すのがいい。「3世代命育みタウン」は、水俣らしさが出る。健やかさが損なわれたが、それでも命を育んできた。「健やかタウン」と言ったときに、障害を持っていても健やかに生きるというのはあるが、普通の人が言うところの「健やか」というところで覆ってしまって、水俣の本質が描けているのだろうかという疑問が自分の中で湧いてきた。一見して、健やかでなくてもいいのではないかと、弱くてもいいのではないかと、それをどう表現したらいいのかという悩みがあつた。まだ答えが出ていない。「3世代育みタウン」で十分よかった。植木委員からは、事務局案でいい。牧迫委員からは、今回の趣旨は「3世代を育む」が主という印象なので、事務局案でもいいというご意見でした。藤本委員からは、先ほどの石原委員のおっしゃっている命というものはすごく重たい、その重みがかかるがゆえに、あえて出てくるとというご意見。続いて、5ページに行きまして、永松座長からは、育むのはいろいろある。命だけではなく交流も育む。今回のネーミングは、明日の水俣の絵、理想的な将来像をあらわす言葉で、要するに目指す目的地なので、健やかでいいと思う。石原委員の話は、背景や現状として認識すべき事柄として出てくる。若干一言あるということも含めて、この「3世代育み健やかタウン」で一応進めていくということで了解してはどうか。こうして、対応策としては、「3世代育み健やかタウン」でご

了解をいただけたと考えております。

続いて、6ページに行きまして、コンセプト(案)のサブネーミングです。「美健のまちみなまた」と「いきいきみなまた」という二つを前回挙げておりました。

初めに石原委員から、「美健のまち」の美しいという趣旨は、例えば「命育む環境のまち」のほうが良いというご意見でした。藤本委員から、「美しい水俣をつくる」のように、この「美しい」を目標に置くのはいい。「みんなまちのたから」はどうだろうか。弱い人も強い人も子供も大人も、みんなこのまちの宝物だという「みんなまちのたから」で「みなまた」というご意見でした。植木委員から、「みんなまちのたから」もいいが、「美健のまちみなまた」を出している。欠席の委員にも投げかけて、もう1回フィードバックしてはどうかというご意見でした。牧迫委員から、「みんなまちのたから」で「3世代育み健やかタウン」、もしくは「美健のまちみなまた」の場合は、「健やか」を外して「3世代育みタウン」としてもいいだろう。永松座長から、今回は「環境」の要素が要るのだろうか。第三者の目で見れば決めたほうが良いと思う。新しい案を植木委員にぜひ考えてほしい。こうして、対応策としては、さらに検討、継続としております。

最後に、7ページに行きまして、標語についてです。

石原委員から、「みんなまちのたから」というのと「美健」と二つの候補が出たので、それによっても10年先のイメージが変わる。「美健」という言葉について、個人的には、前回の研究会で、「美しい」という言葉は、水俣の中で若干の立場による違和感とかイメージの違いのある言葉なので、ほかのものがいいのではないかという話をしたというご意見でした。永松座長から、標語をもう少し詳しくすると、全体像が視覚的なイメージを持って理解できる。例えば、どういうところでどんな交流があると書き込んでいくと、全体がイメージできる。ネーミングと標語の違いがわかりづらい。こうして、対応策としては、望月所長から、標語は事務局で改めて検討しますということになっております。

【永松座長】 ありがとうございます。

では、続けて、資料3と資料4の説明もしていただきたいと思います。

【岩橋室長】 では、資料の3をお開きください。大きな矢印が載っている絵です。

まず、左下の現状から、右上の大きな星に向かって、これまで研究会を行ってきました。まず、現状から出発し、この研究会で議論するテーマを広い意味の健康の分野にすることを第2回の研究会で決めていただきました。次に、健康の分野で目指す方向性として「3世代を育む健康なまち」にすることを、第3回の研究会で決めていただきました。そして、

前回、第4回の研究会で、「3世代を育む健康なまち」のコンセプトとネーミングについて議論していただきました。そこで本日は、一番大きな星のところでは、10年先に目指す地域社会像のコンセプトとビジョン、それに用語の定義を決めていただきたいと思います。さらにその後、ビジョンを実現する手段（施策例）について、意見交換をしていただきたいと思いますと考えております。また、下半分に、今後のスケジュールを大まかに載せております。着実に年度末に向けて進めていきたいと考えております。

それでは、次のページをごらんください。

3段重ねにしてあります。上から、「3世代育み健やかタウン」のコンセプト、そして、真ん中に、コンセプトが目浮かぶようにしたビジョン、そして一番下に、ビジョンを実現する手段（施策例）を挙げてあります。

まず、一番上のコンセプトからご説明します。

前回いただいたご意見をもとに、コンセプトを大きく二つに分けました。最初の3行で大きな目的を示し、次の3行でそのための方針を示しました。冒頭に、「水俣市は」とつけて、文末は、こういう「まちをめざします」という表現にしております。また、1行目の「3世代」の内容につきましては、事務局で再検討いたしまして、二つ目の文の中に、「子ども」や「親世代」、「高齢者」という表現ぶりにし、その内容は、用語の定義で補っております。

それから、健康の括弧書きにつきましては、水俣の地域社会の歴史に鑑み、「身体的・精神的・社会的な健康」として残しております。この「社会的な健康」の意味につきましては、用語の定義のほうで補っておりますので、後ほど説明いたします。

なお、「3世代育み健やかタウン」のサブタイトルにつきましては、具体的な施策が見えてきた段階で、植木委員に出していただけるであろう案をもとに、フィードバックして考えたいと思っております。

次に、真ん中のビジョンについてご説明します。

ビジョンは、「3世代育み健やかタウン」のコンセプト、言いかえると基本的な考え方を、できるだけイメージできるように、目に浮かぶようにしたものです。そのため、ずっとご議論いただいたコンセプトから噴き出したように示しています。そして一番下に、このビジョンを実現する手段（施策例）を若干示しております。なお、前回の最後のほうで、標語として短いものをお出ししたのですが、目指す地域社会像を具体的にイメージするにはやや短過ぎたようですので、事務局でまた改めて検討したいと思っております。

続いて、資料4をお開きください。資料4は用語の定義ですので、上から順次読み上げていきたいと思えます。用語の定義は、「3世代育み健やかタウン」のネーミングの順番どおり、「3世代」「育み」「健やかタウン」、そして「健康」という並びにしております。

まず、「3世代」とは、胎児から高齢者まで全てのライフステージを対象とし、「子ども・親世代・高齢者」の三つに大別します。また、「3世代」というのは、現在の3世代とともに、未来の世代にもつないでいくという意味があります。例えば、胎児は体内に卵子を持っているので、妊娠中の母親の生活が将来の3世代である、母親・胎児・その子を育むこととなります。その下の枠囲みのところは、単に年代で区分をしているだけですので、省略します。

次に、「育み」とは、「子ども・親世代・高齢者」が、交流による相乗効果により、それぞれの課題の解消を図りつつ健康を増進していることとしております。

「健やかタウン」とは、顔の見えるコンパクトな環境のまちで、3世代の育みにより幸せを実感しながら、みんなの健康を未来につないでいくまちとしております。

また、「健康」とは、病気でないとか弱っていないということではなく、肉体的にも精神的にも、そして社会的にも、全てが満たされた状態であるとしております。日本WHO協会の訳をそのまま引用しています。なお、社会的な健康については、厚生労働白書において、何が社会的なものであるかについて定義されているわけではないものの、近年、社会的に孤立する人が増えていると言われているとし、つながりの希薄化が取り上げられ、その具体例として、家族のつながりと地域のつながりが挙げられています。そして、社会と健康について、人と人とのつながりが強く、お互いが助け合う風潮のある地域のほうが、健康でかつ医療費が少ないとも言われており、多くの人々が望むように、地域のつながりを再生し、助け合いの社会を実現することが重要であると言及されています。平成26年版の厚生労働白書の121ページにこのように述べられています。

次に、「多種多様」とは、数や種類が多いさま、バラエティーに富む状態をいい、水俣市民をはじめ、周辺の市や町、国外からの研修生や留学生などにも開かれた交流がフレキシブルに行われることをいいます。

それから、「交流の場(マッチングポイント)」とは、3世代の人たちが互いに行き来し、さまざまな物事のやりとりが行われる場をいいます。水俣市内のあちこちに、水俣にあるもの(場や人や仕組み)を生かして多種多様に設けられ、曜日や時間、内容がさまざまに用意されていて、コンビニエンスストアのように好きなところをいつでも気軽に利用する

イメージです。このような場を、交流の場（マッチングポイント）と称します。

「すこやかに成長（子ども）」とは、子供が安心して近所で遊べて、食事や睡眠の生活リズムがよくなり、心身ともに充実しつつ成長していることをいいます。例えば、人とのかわりの中で、愛情や信頼感、優しさや思いやりを強く有し、地域でのよい記憶や実体験が豊富になり、生活力も向上している状態をいいます。

「すこやかに成長（親世代）」とは、親世代が、一次予防として生活習慣の改善や健康増進に努めており、また、二次予防として健康診断や保健指導を受診するなど、常に健康を意識しながら地域の担い手として成長していることをいいます。例えば、地域でのよい記憶や豊富な実体験・自主的な会への参加など地域における連携を通じて、地域への愛着心を深め、生活の知恵が受け継がれている状態をいいます。

3 ページ、「いきいきと充実」とは、高齢者が、みずからの健康に配慮しつつ、知識や技能、スポーツや趣味などを生かして、人の役に立ち、居場所を見つけて生きがいを感じていることをいいます。

以上です。

【永松座長】 ありがとうございます。

それでは、今日、意見交換する部分は、資料3と資料4でございまして、最初に、資料3の2ページです。上のほうにコンセプトとビジョンとありまして、これまでも数回議論いただき、事務局にて委員の先生方の意見を踏まえて取りまとめたものです。

実は、今日ご欠席の委員の方から、このコンセプトとビジョンについて、事前にご意見を事務局へお寄せいただいておりますので、まず、その紹介をお願いしたいと思います。

【岩橋室長】 お手元にペーパーは届いておりますでしょうか。

金曜日の朝、皆様に資料を配信しましたところ、土曜日に、本日ご欠席の勢一委員からご意見が届いておりましたので、このような形にして、私のほうで読み上げたいと思います。

まず、コンセプトとビジョンについてということで、コンセプトのネーミング等について会議で提示されている案は、いずれも相応の思いが込められていて、よい候補だと思います。ただし、ここに出てくるキーワードについて、水俣市民がどのようなイメージを抱くか、印象を持つかが気になります。できれば、市民の意見を踏まえて考えたいと思いました。今後のまちづくりのスローガンになるものですから、市民感覚に合う表現が望ましいと思います。次に、次世代を担う中高生がどう感じるか、また親世代がコンセプトを理

解できるかは、施策の実効性に大きく影響すると思われます。原案を示して、市民の意見を聞く場や機会を設けることをしてもいいかと思います。

二つ目です。ビジョンを実現する施策についてということで、交流の場は特に目的がなくても集える点が大切なのですが、最初に訪れるようになるきっかけをつくることも必要だと思います。使い方は、各地域の市民の皆さんに自発的に考えていただくこととなりますが、さまざまな参考例を提示することは有益と考えます。

このようなご意見でありました。以上です。

【永松座長】 ありがとうございます。

それでは、今日は、2ページの色で囲んであるコンセプトとビジョンについて、これでよろしいかということでお諮りしたいと思います。これまでいろいろ出たご意見を、事務局で盛り込む形でつくられております。ご質問とか、ここをもう少しこう変えたほうがいいのではないかというご意見がありましたら発言いただきたいと思います。

【松永委員】 私は前回欠席していたので、もしかしたら既に話されているかもしれませんが、資料4の用語の定義は、ビジョンやコンセプトなどと一緒に配布するような形なのですか。

【永松座長】 そうです。まず、こちらの文言について皆さんから意見をいただいて、その後で、こちらの用語の定義の話に移りたいと思います。

【松永委員】 なるほど。了解です。

【永松座長】 何か、ご質問やご意見はございませんでしょうか。

【松永委員】 済みません、続けて。資料3の裏側にあるコンセプトとビジョンのところですが、基本的に、とてもわかりやすく地域の姿が描かれていて、すごくいいと思います。若干気になるのは、コンセプトとビジョンの表現が少しかぶっているところです。あえてかぶせているのかもしれませんが、少し気になります。それから、ビジョンのほうの1行目の終わりから、「それぞれの世代の課題（低出生体重児、子どもの肥満、生活習慣病など）の解消を図るとともに、楽しみながら健康を増進している姿がみられます」とありますが、「それぞれの世代の課題の解消を図るとともに」というところだけ、目標っぽくなっています。ほかのところは、こういう姿を実現していますという書き方になっています。文章の書き方の問題だと思うのですが、ビジョンとしては統一したほうが良いような気がします。

【永松座長】 ほかのところは行動表現になっているけれども、これは少し違うという

ことですかね。

【松永委員】　そうですね。表現の統一の話です。

【岩橋室長】　ありがとうございます。

まず、1点目のコンセプトとビジョンのかぶりの部分ですが、もともと、これまで、コンセプトを中心にご議論いただきました。それで、コンセプトをもとにして、ビジョンというものを今回初めてお示した次第です。何もないところからビジョンをぼんと持ってくるわけではないものですから、どうしてもかぶっているところが少し生じております。

それから、二つ目の表現の統一という点はおっしゃるとおりだと思います。ありがとうございます。

【永松座長】　では、ここの分は、ちょっと……。

【岩橋室長】　少し修正します。

【永松座長】　取り組んでいる……。下の表現と合うように事務局で少し考えてもらえますか。解消されている……。

【石原委員】　自分の意見と今のお話に関してなんですけれども、この文言は、違う次元のことを書かれているかなと私も一瞬は思ったのですが、よく読むと、課題の解消を図る姿が見られます、増進している姿が見られますとも読めて、ここは、どちらの意味で使っているのか。あと、健康課題が完全に解消された時代というのは、あり得ないじゃないですか。ですから、増進や解消に取り組む姿が見られるということならば、これでいいのかなとも思ったので。点の位置ですかね。わからないですけれども。

【永松座長】　確かに、そういうふうにも読めますよね。点で切れているという解釈と、点を含めてAとBが両方後ろにかかるという。

【石原委員】　そうですね。両方にかかるのであれば統一性がとれているし、そうでなければ、ディメンジョンが違うということですかね。

【永松座長】　解消に取り組むとともにとかですね。行動表現にするなら、やはり、そういう感じなんですよ。

【石原委員】　個人的には、「姿がみられます」にかかるのであれば、これでよろしいかと思えます。

【永松座長】　皆さん、いかがですか。そういうふうにも読めるのですが、読まれていて、いかがですか。特に差し支えないでしょうか。

【藤本委員】　「ともに」の後に点を入れなければ。長くなりますけれども。

【永松座長】 そうすると、1文が何か。たまたま、これでは一番右端に点があるので違和感がないですけれども、真ん中あたりにあると、多分日本語として、どこかに点を入れたいですね。

それでは、このとおりにするか、「解消に取り組むとともに」にするか、そのどちらにするということによろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

【永松座長】 それから、私のほうからちょっと。健康の説明が上にも下にもありますが、下で説明するならば上は省いてもいいし、上で説明するならば下は省いてもいいように思えます。いかがでしょうか。

【藤本委員】 下のところでは課題も説明していますので、説明は下にまとめてしまって上はすっきりというのがいいような気がします。

【永松座長】 今のご意見はいかがでしょうか。私も、どちらかといえばコンセプトは簡潔にして、その説明をビジョンでする形になっていて、これはつながっているので、上のほうの括弧書きは除いてもいいのではないかと思うんですけれども。

【石原委員】 それに関連してなのですが、ビジョンの中の「それぞれの世代の課題」のところは、いわゆる身体的健康の例が挙げられていて、その後のほうが、「身体的・精神的・社会的な健康」となっているのですが、本来、両方とも同じレベルのことを書くのではないのでしょうか。これは意図的にされているのかといったことを、やや疑問に思ったのですが。個人的には、身体的・精神的・社会的な健康ということを行っているところは重要なので、上にあってもいいかなとも思いましたけれども、強くはこだわりません。個人的な意見です。

【永松座長】 これでいくと、世代の課題というのは具体的な課題になっていて、その下の括弧書きは「健康」にはこういうものが含まれるという説明というか。だから、上のほうでこれを書いて下のほうを消してしまうか、どちらかですよね。

【岩橋室長】 「それぞれの世代の課題」ということで、今は括弧書きで表現をしているのですが、ビジョンですので、どんな課題があるかをイメージできるようにしたいのです。それで、今は括弧に入っておりますけれども、後で括弧を取るということもあり得ると思っています。

もう一つの健康のほうは、水俣の特性ということで、前回、「社会的な健康」というのが非常に大きな意味を持っているというご意見がありましたので、健康について、今、ビジ

ョンのほうは、括弧書きで「社会的な健康」を残しています。ただ、括弧書きの「社会的な健康」という言葉だけだと、なかなかイメージしづらいと思いますので、コンセプトのほうを取ってもいいですし、ビジョンのほうを取ってもいいかと思います。

【永松座長】　そうですね。どちらかにこの説明があればいいと思いますし、コンセプトのほうはなるべくコンパクトにということで、コンセプトのところの「健康」の括弧書きをとる形でよろしいでしょうか。ビジョンに、「身体的」とかの説明がありますがけれども、その詳しい説明は語句のところでもたすということで、要は、だんだん詳しくなるという形にさせていただければと思います。

石原委員、よろしいでしょうか。

【石原委員】　はい。

【永松座長】　そのほかに。

【藤本委員】　確認です。ビジョンの1文目のところの「それぞれの世代の課題」というのは、私が認識をしていないだけなのかもしれないのですが、この前提は、健康の課題ということですよ。

【望月所長】　基本的にはそうなります。

【藤本委員】　基本的には、健康に対しての各世代の課題ということですね。

【大竹総務課長】　そうですね。しかし、これも今書かれているのは例示ですね。

【藤本委員】　そういうことですよ。

【永松座長】　例示なので書き出すと切りがないということもあって。いわゆる「例えば」ですね。

【牧迫委員】　石原先生が言われたんですけども、この「世代」の括弧の中の三つの並列感にどうも違和感が私にはあります。多分、世代を意識して、それぞれの世代での問題提起なのかなという気はするんですけども、例えば低出生体重児、確かに課題ではあるのですが、これを交流することによってどう解消するのかなと考えたときに、この三つが並列というのにはやや違和感があります。世代を意識するのか、あるいは、身体・精神・社会を意識したそれぞれのニュアンスが伝わるような例に取りかえることが可能であれば、それも一つかなと思います。例えば、閉じこもりがちだとか、孤立……、言葉がいいのかわからないですけども、この三つにはちょっと違和感がありますね。

【永松座長】　確かにそれはあるでしょうね。下の「健康」を視野に入れるならば、「それぞれの世代の課題」の例示も、身体的なもの、精神的なもの、社会的なもの、の適当なもの

のを……。さっき言われた、ひきこもりが適当かどうかはちょっとあれですけども。

【牧迫委員】 そうなんです。ちょっと言葉があれなんですけれども。世代でバランスをとるのもいいと思うのですが、何となく、この三つの並びに違和感があります。

【松永委員】 そもそも、例えが要るかという話だと思います。ビジョンに、「例えば」はあまり入れないような気がします。地域のあるべき姿や企業のあるべき姿を示したのがビジョンですので、そこに、具体的な「例えば」といった話はあまり入れないのではないかという気がします。むしろ、もし書くのであれば、用語集のところで何か少し工夫をするほうがいいと思います。

【永松座長】 世代の課題とはということですね。

【松永委員】 ビジョンとしてはすっきりする気がします。

【永松座長】 今、ご意見が出ましたが。

【石原委員】 同じ意見です。恐らく、ビジョンがつくられた場合には、それをはかるための指標や目標値をつくるということが政策上はよく行われますので、この括弧を取ってしまって、ビジョンを落とし込む作業の中で、例えば、身体的健康に関しては、こういう低出生児や肥満のデータが悪いんですよといったこととか、あと、精神もしくは社会的健康はこういう指標、あるいは目標ではかるといったように、落とし込むところで具体化してもいいかと思います。それから、先週、申し上げたのですが、水俣の子供の肥満や低出生児については、大まかに悪いのはわかっているのかもしれませんが、慎重に統計を分析したほうがいいと思います。

続けて別件なんですけれども、前回の議論を大変幅広くバランスよく組んでいただきまして、ありがとうございました。ほんとうに、前回の議論が生かされていると思います。それで、ビジョンの最後の3行のところ、具体的に、水俣環境アカデミアや資料館の話に絞り込んでいますね。これについて、国水研が出したものだからということで、ここに絞り込んでいいのか。一般的な福祉に関する言及だとすればちょっと絞り込み過ぎなのかなとも思ったので。どちらでも構わないのですが、この3行が入っている理由をお尋ねします。あと、水俣病からの再生のときに、たしか、環境・健康・経済が両立するまちという三つのKのキャッチフレーズがありました。その話は置いて、この「環境」「健康」にするのか、それとも、その話を引き継いだ何かがあるのか、これも気になりました。

【永松座長】 二つありまして、まず、最初の括弧内が要るかという話です。確かに、例示とはいえ、あえて低出生体重児や子供の肥満を特記しなければいけないのか。何でこ

れを選んだかが問われるのではないかと、水俣にとってそれほどの特徴がある課題なのかと言われるとちょっと……。例示ですと言われても、一番目立つのが出てしまいますよね。言われたように、後ろのほうで具体的な課題や指標といったものが当然出てくると思うので、お二人の委員からのご意見いただいたように、ここの括弧を省略するというのはいかがでしょうか。そちらのほうですっきり読めるような気がします。「たとえば」とすると、どこまで例示を入れるか、いろいろ議論が分かれると思いますので。

では、括弧内の「たとえば」以下をここでは省略して、後の具体的な指標などでこういうことを検討していきたいと思います。

二つ目ですけれども、石原委員が言われたように、最後の3行について、上のほうは、広い意味での健康を増進するという形になっているのですが、一番下は、「水俣環境アカデミアと水俣病資料館を活かして」ということが特記されているので、どちらかという、環境被害を受けたという点がやや強調されています。下のほうに行くと、市内各所でのマッチングポイントや交流とかいうものが出てくるので、ここが少し浮いているというご意見ですよね。

事務局、その点はいかがでしょう。

【岩橋室長】 まず、「環境被害を受けたまち」でして、それを環境アカデミアをつかってこれからよりよくしていこうとしていますので、そういったことから、ここに期待も込めてアカデミアを入れております。もう一つ、水俣病というのも外せないと考えましたので、資料館というのをここに上げております。上げないほうがいいのか、あるいは、もう少し増やしたほうがいいのか、そのあたりのご意見をいただきたいと思っています。

【永松座長】 私の個人的意見としては、恐らく、「まちの魅力や市民による活動を」「子ども世代につなぎ、国内外に広く伝えています」というのは、別に悪くないと思うんです。ただ、このアカデミアと資料館の二つは健康問題をほとんど扱ってないので、これらをあえて例示する必要があるのかと。ですから、ここのアカデミアと資料館を消してもいいのかなと私個人は思うんですけれども。上は健康のことなので、健康の施設を入れなければ偏ってしまうことになりそうです。

皆さん、いかがでしょうか。

【松永委員】 私も、そこは要らないかなというのが一つ、「市では」というのは、水俣市という地理的なまちではこういうことをやっていますと言っているのか、市役所という行政として取り組むということなのか。「広く伝えています」になると、読んだ人は、「主

語は誰ですか」と感じる可能性があると思います。「市役所が」ととられると、多分少し違うんだらうなという気がしますので、この「市では」というのが何を示していて、どう読まれる可能性があるのか、そこが不明かなと思います。

【永松座長】 一番上にも、「水俣市では」とあって1回出ているので、水俣を省略して「市では」と書いてあるんですけども、言われているように、「市では」というと、市役所がやることのように聞こえるところも確かにありますね。

【松永委員】 上の「水俣市では……交流が日頃から重ねられ」ていては、交流するのは多分市民や地域の人たちですよ。もちろん、行政も企業も含めてだと思っただけですが。でも、下の「市では」というのは、「広く伝えています」にかかっている、そうすると、「交流」は自然発生的に出てくる可能性があります、「伝えています」となると、能動的に誰かがやっている感じを私は受けます。

【永松座長】 そうですね。これを普通に読むと、市役所がやっているように読めますね。

【石原委員】 経緯として、最初、「水俣市は」という主語はなく、文章の最後のほうに、「つないでいく水俣を目指します」というような文章だったんですけども、植木委員の、こういうコンセプトづくりでは、主語が「何々市は」のほうがきれいに見えますよというご助言でこうなっている経緯があるので、もとに戻すのがいいのかどうかについては、植木委員のプロフェッショナルなご意見もあると思います。前はたしか後ろにあったんですよ。

【植木委員】 そうです。

【永松座長】 植木委員、いかがですか。

【植木委員】 コンセプトの場合で、主語を「水俣市」とするのは提案しましたのでそれでいいと思うのですが、ビジョンで、また、「水俣市」になるとくどいんですね。だから、ビジョンのほうは締めの方に水俣を使ったほうがいいような気がします。「市」など同じ言葉がたくさんつながっているのです。

今、三つの節がありますね。リライトするのであれば、この中で一番重要なところから先に入っていくほうが良いと思います。さらに、それをより強調するために、最後に、「水俣市では」「めざします」という感じの組み立てのほうが良いと思います。コンセプトの「水俣市」はいいのですが、ビジョンでまた「水俣市」と表記するのはいただけない気がします。

【望月所長】 ビジョンの最初の「水俣市では」を取ってしまって、一番最後の3行のところにある「市」のみで表現したほうが整うということでしょうか。

【植木委員】 そうなんですけれども、要は、コンセプトで、「3世代」が健やかに育まれるタウンとなっていますよね。そうであるならば、今入っている「水俣市では」ではなく、「3世代が幸せを実現するためには」として、そこから落とし込んでいくような書き方もあります。要は、コンセプトで言っていることを、より具体的にロードマップ的な言葉に置きかえていく。健やかタウンですから、ミクロからマクロに広げていくわけで、同じように言葉の組み立てを広げていくという。結論から言うと、3世代が幸せを実現するためにはどういうことをしていくのか、具体的に落とししていくということですね。

【永松座長】 コンセプトで「水俣市」と書いてあるので、ビジョンの「水俣市」を除いてはいけないんですか。

【植木委員】 この文章であれば、括弧書きは削除して、「水俣市では」をなくしていいのではないかという気がします。

【永松座長】 「水俣市」がなくても意味は通じますよね。

【望月所長】 下の「市では」も要らないのかもしれないですね。そういう手もあるのかなと。

【永松座長】 ちょっと整理させていただきますけれども、最後の3行のところの「水俣環境アカデミア」と「水俣病資料館」は削除してよろしいでしょうか。「まちの魅力や市民による活動を、子ども世代につなぎ、国内外に広く伝えています」ということで。

(「異議なし」の声あり)

【永松座長】 それから、「市では」については、今、一番上に「水俣市では」、一番下に「市では」とありますが、スタイルとすると、一番上に「水俣市では」とあるので一番下の「市では」を削除すると、上のコンセプトに「水俣市は」と書いてあって、下のビジョンは、当然、水俣市のことを書いてあるとわかるから、一番上の「水俣市では」と下のほうの「市では」の両方を取っても差し支えないとく二つがあると思います。

いかがですか。両方取ってよろしいですか。

【植木委員】 はい。

【永松座長】 ほかの委員の先生方はどうですか。よろしいですか。

(「異議なし」の声あり)

【永松座長】 では、ビジョンでは、1行目冒頭の「水俣市では」というところと、下

から3行目の「市では」を削除すると。

そのほかに、お気づきになったこと等ございませんでしょうか。

【石原委員】 その関係で、済みません。「課題」の後の括弧を取ると今決まったと思いますが、括弧を取るのであれば、すっきりという意味で、下の括弧も取って、上にはっきりと、「みんなの身体的・精神的・社会的な健康を良くする」というのもあるかなと思いました。括弧を取るのであればですね。

【永松座長】 いかがでしょうか。どっちもありで、どちらがすっきりするかというか、おさまりがいいかという話だと思います。植木委員はいかがでしょうか。「健康」のところの括弧書きが上にあるのと下にあるのとのおさまりがあいですが、いかがでしょうか。

【植木委員】 「健康」が上にあるほうが。

【永松座長】 おさまりがよろしいと。

【植木委員】 はい。

【永松座長】 ほかの委員の先生方はいかがでしょうか。いずれにしろ、どちらかできちんと説明がされていればいいと思います。読みやすいというか、すっと流れるほうがいいと思いますけれども、いかがですか。

【望月所長】 確かに、それぞれの世代で括弧書きを取るのであれば、その後の「健康」は、全部コンセプトに括弧書きを移して削除してしまうほうが読みやすいかような感じがします。さっきの結論と逆のような話になってしまいますけれども。

【永松座長】 わかりました。それでは、今ご意見がありましたように、ビジョンの「課題」のところの括弧書きを取りましたので、その下の「健康」の括弧書きも取って、そのかわりに、コンセプトの「健康」のところ、括弧書きをしてきちんと説明する形にしたいと思います。

(「異議なし」の声あり)

【永松座長】 ほかにございませんでしょうか。

【望月所長】 それでは1点。コンセプトはかなり固めていただきました。ビジョンにつきましてはこれからの議論で、いろいろと詳細にどういう活動をしていくかについてご意見をいただきますので、それを踏まえて見返していただきますとまた違う切り口も出てくると思います。そういう意味では、今、がちがちに固めるというのではなく、こういうふうなイメージ、こういう作業が必要だということでお示ししています。ですから、これは、議論が進むにつれて、もう1回見ていただく機会が出てくると考えています。

【大竹総務課長】 この後、具体的な施策例・事業例が出たときに、こういうものが入っているのであれば、こういう表現も必要ではないか、こういうことも必要ではないかということもあるかと思しますので、そのときにまた改めて、そういった観点で見直してもらえればと思います。

【永松座長】 それでは、今お話がありましたように、具体的な施策例等の例示などを考えた後で、改めて文言等につけ加えるところがあればつけ加えるという形で、一応、コンセプトとビジョンに関して、現段階ではとりあえずこの表現で進めさせていただきたいと思えます。

それでは、用語の定義がありましたけれども、用語の定義に関して、文言等、表現を変えたほうがいいところがあればご意見をいただきたいと思えます。

【植木委員】 この間、座長から、新しい案をぜひ考えてほしいということがありましたので、一、二、考えたものを披露したいと思えます。

【永松座長】 それは、サブタイトルということですか。

【植木委員】 ええ。

【永松座長】 いや、まず、用語の定義、資料4のほうを。済みません。

【松永委員】 気になる点が二つあります。

一つは、「3世代」の(2)の明朝体で書いてある「例えば」のところですね。「例えば、胎児は体内に卵子をもっている」というのは、かえってわかりにくい気がしています。用語の定義というのは、一般の市民の方にわかりやすく書くのが基本だと思います。私は、この「例えば」は要らないと思えます。

それから、一番下の「健康」のところですが、特に、社会的な健康の説明を厚生労働白書から引用しているのですが、別に論文ではないので、そんなに厳密な必要はなくて、もうちょっとざっくりと書けばいいのではないかという気がしていますが、どうでしょう。

【永松座長】 そうですね。それでは、今、松永委員から出ました、まず、「3世代」の(2)のところですね。ここは、今の3世代だけではなくて、子供から見たときの将来の3世代という意味なのですが、この明朝体の部分は要らないのではないかというご意見が出ました。いかがでしょうか。私も、これは要らないような気がします。削除ということでもよろしいですか。未来の世代につないでいくというか、先の世代のことも3世代という言葉には入っていますから。

(「異議なし」の声あり)

【永松座長】 では、ここは削除ということで。

それから、2番目の社会的な健康です。簡潔にすると、次のページのかぎ括弧の部分を生かす説明ぶりになると思います。それについて石原委員のご意見を伺いたいのですが。

【石原委員】 ありがとうございます。実は、ここも手を挙げて言いたかったところで

す。普通、社会的健康、社会的ウェルビーイングというときには、大体、世界中の公衆衛生の教科書などで、貧困や犯罪、差別などが無いというようにすっきり書かれているので、厚生労働省がなぜこんな持って回った言い方をしたのかなと考えると、もしかしたら、各省庁の範囲の話で、例えば、厚生労働省として経済などには口を出しにくいということがあって、こう書いたのではないかと思ったんですね。何を言いたいかというと、端的に言う、やや回りくどいと。私も、何かこれにかわる権威あるところで、ソーシャルヘルスのウェルビーイングの定義がはっきり書いてあるものがないだろうかと、今、インターネットで調べていたんですね。すぐには見つからなかったんですけども、繰り返しますが、普通は、差別や貧困、暴力、戦争といったものがないというようなことがすっきり書かれています。書くのであれば、そのほうがわかりやすい気がします。

あと、先週、藤本委員からありましたように、中学校の教科書にも三つの定義は載っている、子供も何となくわかっているのではないですかという意見もあるのかなと感じています。

望月委員、いかがでしょうか。

【望月所長】 ちょっと調べてみたんですよ。意外とないんです。前半の部分などは、WHO協会が協会訳を出しているんですね。では、社会的健康の訳が出ているかという、出ていません。社会的要因については、一応、WHOがたくさん検討会を設けて、10ほど要因があるとか、いろいろな報告書を出しているんですけども、社会的な健康を端的に表現したものはなかなかないですね。そこで、探しに探して、結局、平成26年度の厚生労働白書から引用しました。オリジナルでつくるも、それはそれでなかなか難しいところがありますし、回りくどいというご意見はごもっともではあるのですが、お示ししているとおりになりました。簡潔な表現にするようにもちろん考えてはおりますけれども、ある定義によればということで、本日はこういう形でお出ししました。

【石原委員】 ちょっと私も見たんですが、確かにすぐに定義が出てこないんですね。

【望月所長】 意外と出てこないんですよ。

【石原委員】 もし後ほど決めていいのであれば、用語の定義に関しては私のほうで調べてもよろしいでしょうか。

【永松座長】 いずれにしろ、このところはやや長過ぎるんですね。一般市民に配慮する必要がありますので、この文章でいくと、「家族のつながり」とか「地域のつながり」という言葉を使うことにして、前段の説明部分は要らないかと思います。

では、これに関しては、石原委員に簡潔にあらわす文章をお考えいただいて、事務局へ情報提供いただきたいと思います。

【石原委員】 はい、情報提供をさせていただきます。

【望月所長】 一つの手としては、前半の部分を取って、つながりの希薄化の中で家族と地域のつながりについてだけを取り上げるという手はあるかとは思いますが。何によるべきか、非常に苦労しているところではあります。意外とありません。

【石原委員】 調べていて思ったんですけども、このWHOの定義は1946年ぐらいに公になっていて、今から50年以上前の言葉遣いなんですね。今の公衆衛生だと、恐らく、Social determinants of healthとか、そちらのほうで社会的健康を使っています。ですので、公衆衛生業界も大分定義がかわってきたのかなと、調べつつ感じたところです。

【永松座長】 いずれにしろ、二、三行ぐらいで説明しないと、多分、市民の人は読まない気がします。これについては、済みません、石原委員に調べていただきたいと思えます。

【石原委員】 はい、わかりました。

【永松座長】 そのほか、委員の方で、気になった部分、表現ぶり等がございますでしょうか。

では、私から。最後の「いきいきと充実（高齢者）」ですが、「人の役にたち」というのは、人だけかなと思って。自然保護なども入るような気がしたんですけども。

【望月所長】 「社会の役にたつ」という感じなんけど。

【大竹総務課長】 まさに社会への貢献といったようなイメージなんですよ。イメージとしてはそういうことです。

【永松座長】 ただ、高齢者の場合、常に社会に貢献する必要があるのかなともちよっと思ってですね。「居場所を見つけて」というのも、居場所がないのが前提のような気がしますし。個人的には、「人の役にたち、居場所を見つけて」は外してもいい気がします。「知識や技能、スポーツや趣味などを活かして」の部分も、スポーツは要らないと思います。

「知識や技能、趣味などを活かして、生きがいを感じて日々を過ごしていることをいう」という感じで、無理やり社会貢献をさせなくてもいい気がします。(笑)

【石原委員】 もう一つの考え方としては、ものすごく難しい言葉以外はあまり定義をしないでにおいて、逆に、市民の方に「いきいきと充実」とはどういう意味なのかを考えてもらえるワークショップをすとか。それも一つの手だと思います。

【大竹総務課長】 確かに、高齢者もそれぞれ考え方が違いますから、あえて定義をしなくてもいいかもしれません。

【永松座長】 今のご意見はいいですね。「子ども・親世代・高齢者」のそれぞれに関し「すこやかに成長とは」と具体的に三つ書いてあるんですけども、これを書かないという選択肢もあるんでしょうね。特に親がすこやかに成長というのは……。まあ、成長するというのは、人によっていろいろあるだろうと。

【石原委員】 そこを考えていただくのもまた住民参加というか、とてもおもしろいと思います。

【永松座長】 この三つは書かないというのもありますね。逆に言うと、ここに全部を織り込むのが難しいという。例えば、親世代や、もちろん子供でも、国際的な交流を広げていくような人たちもいるでしょうし、いろいろなものが入ってくるので。

事務局から、そこの説明をしていただきたいと思います。

【岩橋室長】 今の点ですが、これから資料5を説明していきますが、その2ページの中ほどに、マッチングポイントでの交流の目標例を挙げています。①で子供がこんなふう、②で親世代がこんなふう、③で高齢者がこんなふうにと、交流の目標の一つの例がまた出てきます。委員ご指摘のように、用語の定義の中にはなくても、別のところで同じようなことが出てきますので、そちらのほうでもいいのかなと感じたところです。

【永松座長】 いかがでしょうか。確かに、後ろのほうで似たような文章が例示で出てくるということもありますし、健やかなの意味は人によって大分異なりますので、あえて、限定的に定義づける必要もないのではないかというご意見です。後で施策のことを議論して、もし必要であれば、その時点で改めて追加するかどうか検討するというので、この「すこやかに成長（子ども・親世代）」と「いきいき充実（高齢者）」は、とりあえず、削除したいと思います。

そのほか、何かご意見はございませんでしょうか。

(「なし」の声あり)

【永松座長】 この用語の定義も、施策等の検討が終わってから、これでいいかどうかを再確認させていただきますので、とりあえず現時点では、用語の定義はこれで一応おさめさせていただきたいと思います。

それでは、後半に入りまして、具体的な施策例についての意見交換を始めたいと思います。まず、事務局から資料5について説明していただいた上で、皆様のご意見を伺いたいと思います。

【岩橋室長】 それでは、資料5をごらんください。「3世代育み健やかタウン」を実現するための手段（施策例）です。

まず、交流の場、すなわちマッチングポイントの例として、①から⑥まで6種類の場を挙げています。これらは、水俣に今あるものを活かすことで実現しそうなものです。例えば、水俣市内において、②のふれ合いの場のうち、現在、デイサービスは14カ所、地域リビングは20カ所、本読み場は18カ所、茶飲み場は5カ所あります。③の自主的な会の場は、フューチャーセッションで出たアイデア段階のものです。そして、⑥のごみの分別の場、これは約300カ所あります。

次に、青い文字の交流の事例といたしまして、これまで各委員からいただいた情報を簡潔に整理しています。ここには主に前回のご発言を挙げています。

1枚めくっていただきまして、続いて2ページに行きます。

マッチングポイントでの工夫例を挙げています。おおむねフューチャーセッションで出たアイデア段階のものです。まず、①の遊び場では、例えば、市に登録した遊びコーディネーターや見守り隊がいて、その人たちが名札やバッジを着用している姿をイメージしています。地区ごとに遊び場マップが作成され、遊びの種類やコーディネーターのいる時間帯などがそれに示されていて、それをスマートフォンで検索できるように工夫したいと思っています。

次に、②のふれ合いの場では、例えば、参加者が教え合いながらコースターなどを作成したり、童謡を歌ったり、紙芝居で楽しんだりする姿をイメージしています。作成したコースターをお土産として持ち帰れば、家族との会話のネタにもなりますし、それを友達に自慢したりして、口コミで参加者が増えるように工夫したいと思っています。

次に、真ん中に行きまして、マッチングポイントでの交流の目標例として、世代ごとに①から③で示しています。読み上げますと、一つ目の目標は、「子どもが、他世代と多くの関わりの中で、愛情や信頼感、やさしさや思いやりを強くもつようになり、地域での良い

記憶や実体験を重ねて成長できるようにすること」としています。二つ目の目標は、「親世代が、子どもとの遊びなどを通じて健康増進にも努め、健康診断や保健指導を受診するなど、常に健康を意識しながら地域のリーダーとして成長するようにすること」としています。三つ目の目標は、「高齢者が自らの健康に配慮しつつ、知識や技能、スポーツや趣味などを活かして、人の役にたち、居場所を見つけて、生きがいを感じながら生活できるようにすること」としています。

最後に、一番下に、交流の目標を達成するための検討事項の例を挙げています。数年間、継続的・定期的に行うために必要なこと、それから、市や公的機関が何をどこまで行うのか、また、リーダーや担い手になる人の育成目標や研修の実施など、これまでいただいたご意見をもとに思いついたものを挙げています。そして、最終的には、一番下にあるように、数年間継続してマッチングポイント間の相乗効果を出したいと考えています。

次に、3ページをごらんいただきますと、今まで各委員から、先進事例や今ここで検討しているものに近い事例ということで、幾つかメールでご紹介をいただきましたので、それを挙げています。

以上です。

【永松座長】 ありがとうございます。

資料5の1ページにある程度の説明書きがしてあるものに関しては、委員の皆さんも思い出されたことと思います。私は、1行しか書いていない分について既に忘れてしまっているところもあるので、申しわけないですけども、ここに書いてあるご意見を発言された委員の先生に、もう1回、こういう形であれば水俣でもできるのではないかという話も加えて、簡単に説明をしていただければと思います。

最初に、高校生による自分プロジェクトの実施です。

【松永委員】 それは多分、私が言ったと思います。正確に言うと、「全国高校生マイプロジェクトアワード」です。高校生が、地域や社会の課題を自分事として捉え、その解決に少しでも貢献できるようなプロジェクトを自分で企画して実施するという内容です。全国4カ所で2泊3日の合宿をやって、そこで企画をつくり、その後、地域に帰って3カ月ほどアクションを起こします。実際に実行し、そして、それをまた持ち寄って発表します。その中で、よく頑張った高校生やすぐれた活動については、全国大会へ出場します。全国大会でプレゼンして、優勝者が決まる流れです。さらに、文科省の後援を受けていて、優勝者は文部科学大臣賞が受けられることになっています。

【永松座長】 これを仮に水俣で実施する場合、どんな形が考えられますか。

【松永委員】 そのままやるとすると、それを担う主体はどこなのという話が当然出てきますがそこは置いておいて、高校生が、自分たちのまちを発見するとか企画をつくるという、要するに主体的に取り組む活動についてはできるのではないかという気がしています。例えば、水俣市内の高校や中学校の授業やプロジェクトの一環としてやることも可能でしょうし、マッチングポイントを使って、そんなに大それたことではなく、小さなことができるかもしれないという気がします。例えば、マッチングポイントの使い方を高校生に考えさせればいいと思います。つくったので、はい、使ってということではなくて、ここを、どう使いたいのか、どう使ったら効果的と思うのかという企画の検討からかわらせることで主体性が出てくると思います。

【永松座長】 高校生に、地元のことを考えてもらう、主役になってもらうという形での取り組みですよね。先ほど言われたような公民館などの交流拠点をどう活用して交流を図りますかということテーマに、高校生たちがいろいろ考え実践し、そして、その報告をすると。例えば、そういう形ですね。

【松永委員】 そうですね。

【永松座長】 ありがとうございます。

それから、島根県の海士町ですか。

【松永委員】 これも私です。島根県の海士町は、壹岐諸島のうちの一つなのですが、子供がどんどん減っているため全国から地元の島前高校に国内留学生を呼び寄せようということで、教育に力を入れています。町が塾をつくって勉強を教えているのですが、勉強を教えるだけではなくて、さっきのマイプロジェクトのように、地域のいろいろな課題を自分たちで見つけ、それについて学習し解決策を考えるということをやっています。島に生まれてずっと島で育った子供と外からやってきた子供がまじり合っていく中で、新たな発見をしていく活動です。これは、全国的にすごく有名で、うまくいっているモデルケースになっています。

【永松座長】 これをすぐに水俣ではできないですけども、何か参考になるところがあるとしたら。

【松永委員】 さっきとかぶりますが、子供たちが地域のことを発見できるような仕掛けをつくるというのが一つ。それから、アカデミアに来た大学生や高校生、そういう外から来た人と交流をするポイントをつくると。自分の地域の中にずっといると気づかないこ

とがたくさんありますので、その辺かなという気がします。

【永松座長】 高校生にしても、普通は地域外の人と交流する機会は確かにないので、そういう場を意図的に設定すると。大学でも、複数の大学の学生たちが集まると非常に新鮮で、一生懸命になって取り組むという実例がございますので、確かに一つの仕掛けとして考えられると思います。

【望月所長】 ちょうど今、ご存じかと思いますが、水俣高校が県内2番目のスーパーグローバルハイスクールという形で、今年度から活動を始めています。グローバルなのでどちらかというと国外などですけれども、これから活動をどう発展させるかということで、ちょうど国水研と高校と市で協定を結んだところです。高校生の活動ということでいろいろとお話しいただきましたら、それをつなげていけるとと思います。ありがとうございます。

【松永委員】 海士町の島前高校もスーパーグローバルハイスクールに選定されていて、地域に出て行って課題を発掘し解決策をつくることに関して、英語でプレゼン資料をつくるんです。そして、2年生の時に海外研修でシンガポールの高校に行って英語でのプレゼンやディスカッションを行っています。単に調べただけではなく、発表する場や交流する場があると、すごくいい気がします。

【永松座長】 ありがとうございます。

それでは、高浜市に関しては。お願いします。

【牧迫委員】 これは今、私どもの研究所と共同でやっていますけれども、愛知県にある4万5,000人ぐらいの規模の市における高齢者を対象とした事業です。高齢者の居場所として、市の中にたくさんのスポットをつくっていきこうという趣旨です。そういう場所を、民間のところや公共施設も含め市へ申請しまして、市が健康自生地として認定をしていくというのが大きなストーリーです。今、市の中にたしか90カ所ぐらいあるかと思うんですけれども、そこに市民の方が出向いていろいろな活動をしています。体操の教室、趣味活動、パソコンを使う教室とかいろいろあって、そういうところに行くと、ポイントのようなもの、シールとかスタンプとか、それを押してもらえて、年に1回、何個かたまったら応募券として応募すると。それによってなるべくいろいろなところへ外出をしてもらおうというのが大きな趣旨です。

今までは、ポイントは紙でやっていたのですが、今、私どもと一緒にやっている事業では、そういう活動によって、ほんとうに健康状態がよくなるのか維持されるのかという確

認をしていきましょうと。そこで、4,000名ぐらいでしょうか、特に認知機能や身体機能についての健康チェックに参加をいただいた方々へ、歩数計をお配りしています。こういった自生地に行っていただくと、そこに設置してある機械が歩数計を読み取りまして来たことの記録が残りますし、そこにかざすことにより今月どれぐらい歩いているか、毎日どれぐらい歩いているかが個人にフィードバックをされて、それも活動のポイントとしてどんどんたまっていくというシステムを構築しています。それにどういう効果があるのかを今、検証している段階ですが、概要としてはそういう形です。

自生地を運営する担い手の方々には別のボランティアポイントというものをつけているので、実際に行く人とは違う形の活動としてのインセンティブというか、参加するだけでなく担い手としての活動にも一つの価値をつけています。

【永松座長】 かなり大がかりな気がするんですけども、予算的にはどのぐらい使われているんですか。

【牧迫委員】 多分、自生地自体の予算はそれほどかかっていないと思います。登録したところに、それぞれ年間で数万円ぐらいの補助金を市が出して、あとは自生地自体が独自でいろいろと運営をしていくという。だから、規模が結構ばらばらで、小さなカフェだけを個人で運営しているところもあれば、大型店舗の薬局の一角にそういったスペースをつくって自生地としてやっているところもあります。民間であれば、人が来てくれるだけで経済的な波及につながる可能性もありますので、市からどっぷりお金を出してという形ではやっていません。ただ、効果検証に関しては我々の研究事業としてやっていますので、我々のほうから結構予算立てしたりというのはありますが、事業自体にはそんなに大きなお金はかけていないと聞いています。

【永松座長】 ありがとうございます。

では、姪浜西南大学まちプロジェクト、お願いします。

【岩橋室長】 これは勢一先生です。

【永松座長】 それでは、高校生による休耕田の復活。

【石原委員】 これは私が言ったのですが、説明が難しいです。それ自体の事例は、大分県で、ちょっと荒れている学校の教員の方が、その子たちの将来や社会との再統合を考えてということで、結論だけ言いますと、高齢者と高校生が一緒になって、地域の休耕田を復活するようなコミュニティーをつくっていったという事例です。そういうのがあったんですけども、今続いているかどうかは不明です。地域の高齢者と保育所不足をマッチ

ングするようなサービスなど、それに類似するものは幾つもあると思います。

【永松座長】 今、思い出される分で類似するものがあれば。

【石原委員】 水俣でもつくれるかもしれないものとしては、地域の高齢者と保育所の不足による地域の子供のケアを一体化するようなものというのが、幾つか聞いて、おもしろいなと思いました。

それ以外に、前の会で申しました健康づくりの事業があります。成人以上の健康増進に関し行政もしくは保険師のアクセスがないという中で、子供に健康教育を学校でして、学校であったことをおうちに帰ってお母さんたちに話すというような、子供から親が学ぶというプロジェクトです。これは、練馬だったと思いますけれども、前、国立保健医療科学院のプロジェクトでそういう事例を収集しましたというお話をさせていただきました。

水俣でそれに類似したものとしては、松永委員の意見と非常に近いのですが、健康のことを子供が学校で習って親に言うというだけではなくて、例えば、水俣の歴史や水俣病について、1990年代後半以降の子供たちは学校でも教育を受けていますが、それ以前の世代は意外に語る場がなかったという中で、子供を通じてもう1回、水俣病も含めた水俣を学ぶと。もちろん、水俣病は二度と繰り返してはならない過去ですし、学ばなければならない歴史なんですけれども、しかし、それがあったからこそ、水俣がほんとうに環境・健康都市として再生しているというポジティブな面も含め、水俣のアイデンティティーと誇りの復活について、子供を通じて高齢者や大人の世代に働きかけてもいいかなということを、この前、申し上げました。

最後に、これも松永委員の意見と近いんですけれども、水俣発祥の地元学というものがあります。あれも、地域の若い人と地域の外の若い人が組んで、水俣の歴史や地域のさまざまな財産を知っている高齢者や大人に聞き取りをし、そして、地域の絵地図をつくったり、地域の歴史に関して子供たちが高齢者の聞き書きをつくったり、そこから地域にある財産を使って大人と子供と一緒に商品開発をしたり、場合によっては、マッチングポイントの案を、大学生などの若い人も含めた水俣の中の子供と外の子供と、水俣の大人・高齢者がやるという地元学のプロジェクトもおもしろいのではないかと思います。

【永松座長】 ありがとうございます。

今、地元学とあったのですが、水俣には地元学の有名な方がおられますけれども、意外に個人の情熱に頼っているようなところがあって。確かに、年配の方々から、子供さんというか、中学生、高校生でもいいのですが、聞き取りをしてそれを残していくというか、

そういう作業は非常に大事だなと。どんどん忘れ去られていますので、過去の歴史を若い子供たちが引き継いでいくという意味でも大事だと思います。

それでは、退職者の積極的参加というのはどなたですか。

【藤本委員】 私だと思います。今ちょうどこの時期にやっているサマースクールがございまして、参加してくる子供さんは小学生で、水俣市それから水俣市にふるさとを持つ出身者のお子さんが集まっています。毎日、通学型で参加してもらうというスタイルですが、そこに実は私の恩師、当時の中学校、小学校でお世話になった先生にピンポイントで声をかけさせて頂き、参加してもらっています。ですから、子供たちと接する能力は当然ですが非常に高く、ここに本当は若い教師の卵の方などがおられれば、すごく勉強になると思います。そういった退職されたOBの先生方にお手伝いをいただいて、サマースクールを展開しています。

実際に、80歳というご年齢で今まだお元気な先生がおられまして、子供たちへの問いかけの仕方や言葉の選び方、会話のスピードなども私たちとは全く違って、子供たちがすぐに集中するんですね。ですから、いろいろなプログラムをやっていく中で、そういった先生方が入ってくださると、非常に子供たちもやる気を持つでしょうし、そういった先生はおそらくたくさんいらっしゃるので、積極的に参加していただければ、それがほかの高齢者の生きがいにもつながります。先生同士のネットワークだけでなく、横のつながりで地元の同じ世代の同級生もお持ちでいらっしゃるのです、そういった方々をうまく巻き込んでくださるような形になるのではないかなと思ってご紹介しました。

【永松座長】 ありがとうございます。

一番最後の大学生と高校生というのは事務局でつけ加えられたそうです。

それでは、今、一通りご説明いただきましたが、植木委員から、先ほど言われましたサブテーマの関係もありますので、その説明をしていただきたいと思います。

【植木委員】 今の資料5に関して一つだけいいですか。

【永松座長】 どうぞ。

【植木委員】 私、マッチングの例や交流の事例で、3世代による日曜学校のようなものやってはどうかと。日曜日に3世代の人たちが集まって開く学校です。一言で言うとヘリテージ教育ですね。地域の誇りといったものを、子供が言って、おじいちゃんが言って、お父さんが言ってという感じで、最終的には、シチズンシップというか市民教育につながって、能動的な学習——アクティブ・ラーニングといいますか、そのようなことを

日曜学校でやる。イギリスなどでよくヘリテージ教育をやっていますよね。地域の誇りを、おじいさんが子供に、その場所に連れて行って説明していくわけです。前に、私、リレーというキーワードをお話ししたと思うんですけども、子供にとってはアクティブ・ラーニングになっていくし、活動としてはシチズンシップ的なヘリテージ教育につながっていくようなものができたらいいのではないかと思います。

【永松座長】 ありがとうございました。

【植木委員】 それから座長に宿題と言われていた件です。

【永松座長】 皆さんのアイデアのヒントになるようなキーワードがあれば。

【植木委員】 「美健」ということを言い出したじゃないですか。6ページの(5)のサブネーミング「美健のまちみなまた」「いきいきみなまた」についてと。これについて、美しいということに対する抵抗的な発言もあって考えてみたんですけども、偶然、7月30日土曜日にNHKのEテレのアンコールで「水俣病 魂の声を聞く～公式確認から60年」という番組を見ました。そのとき、取材の対象になったおじいさんが、非常にいじめられたと発言されていて、それを聞きながら、私の中で出た漢字が「育む」でした。今でも、「3世代育み健やかタウン」と訓読みでやっているわけですが、「育む」という言葉と「健やか」と「環境」、この三つの漢字が水俣にとって重要なのかなと。そこで、ずっと考えていたら、そうか、3世代ということは世代が重なっているわけだから、その重なりを言葉であらわせないかなと思ったんです。それが「育育」です。「育育」と表記してもいいし、「育々」でも構いません。要するに、「いきいき育育」とか。そうすると、「3世代育育」とか「世代育育」とか「いきいき育々みなまた」とか。または「いきいき」を、生きると地域を生かすという意味の漢字に変えて「生きる」と「活きる」にする。「3世代育み健やかタウン」だから、「育育健康みなまた市」とか「生き活き育育」とか、重ねるのもいいなと。シンプルに、「育育タウン」でもいいし、要は「育育」です。今までの水俣の歴史においても今後においても、一文字であらわせといったときに、育てる、育つ、育むという字が一番腑に落ちて、それを重ねて使えば「育育」になるのではないかと。「美健」以外のものとして、「いきいき育育」というのが私の考えた結果です。

あと、語呂合わせで、「地育地健」とかね。地産地消ではないけれども。

私の中では、「育育」というふうに同じ漢字を二文字並べて使うか、「々」を使うか、そういうのかなと思います。

【永松座長】 ありがとうございました。

これについては、今日決めるというよりも、委員の先生方に、「美健」のほかにこういうキーワードがあるということをお含みいただくということで。次回もまた具体的な施策の掘り出しのために先生方にどんどん言っていただく時間をたくさんとる予定ですが、そういったものがある程度出そろった後、どれが、キャッチフレーズというか、下につけるものとして一番いいのかというのを、改めて、植木委員ほか先生方にいろいろ意見交換いただきたいと思います。

私は最初に「いくいく」と聞いて、あの世に「逝く逝く」かと。(笑)だから、漢字で書かないと、「いく」とはどこに行くんですかと思ってしまったのですが、でも、「育む」とか「健やか」というのは非常に大事な言葉です。「育む」というのはやっぱりいい言葉ですよ。

【植木委員】 Eテレで被害者の方が言われている言葉の中で、字幕にも出ていて、それが私にすごく刺さったということです。

【永松座長】 宿題をちゃんとやっていただきましてありがとうございました。それでは、先ほど言いましたように一通りいろいろアイデアを出していただき、最後にまた改めて意見交換を行わせていただきたいと思います。

植木委員、どうもありがとうございました。

そろそろ次の場所に移動する時間が迫ってまいりました。あと5分ぐらいということですが、何かありますか。アイデアフラッシュでも結構です。

【牧迫委員】 忘れないうちにいいですか。

資料5の1ページを拝見していて、私もやっていてそうなんですけれども、こういったポイントのようなハード面がたくさんできればいろいろな人が来るかということ、そうはうまくいかなくて、やっぱり人が動かなければいけないと思っています。

先ほどのいろいろな事例を聞いていて、あくまでも、今、思いついた一意見なのですが、マッチングサポーターのような形で、例えば、OBの教員だとか高校生だとかに登録するなり何なりしていただいて、こちらから、ここは若い世代が少ないから高校生のマッチングサポーターを派遣するとか、ここは上の世代の方がいてつながりがあったほうがいいのでOBの先生に行ってもらおうとか、そういうソフトウェア的な体制も必要だと思います。それをボランティアでやるのか、多少有償でやるのか、いろいろ問題はありますけれども、そういう側面も必要かと思っています。

【永松座長】 確かに、それ自体を生きがいにしてもらうというか、やりがいにしても

らうというか。どこでしたか、結婚率が高いところで、マリッジサポーターという感じのものがありましたね。市長さんが任命書を渡して、世話好きのおばさんが張り切ってあちこちを回って、半ば無理やり引き合わせるとか、そういうことをテレビでやっていました。こういう取り組みをつくっていくこと自体を一つの生きがいとしてやってくれる人たちがあちこちに出てくると、地域としても非常に活気が出てきます。そこの仕掛けですよ。

【牧迫委員】 健康サポーター的なのは結構どこでもやっているの、あまりおもしろみがないかなというのはありますけれども、そういうふうに引き合わせる、マッチングをさせるサポーターという意味では、結構独自性があるかなと。

【永松座長】 そうですね。世話好きの方をこう……。要は、お世話ですよ。あるいは何か新しいものをつくるのに興味がある人とか。ありがとうございます。

そのほかに何か。アイデアレベルで結構です。

【石原委員】 それと類似して。マッチングポイントの工夫例で、遊びコーディネーターというお話がおもしろいなと思って見ていました。水俣では環境マイスターという概念が地域再生の柱になりましたけれども、遊びというのもとても重要な概念だと思います。例えば、水俣にしかない地域のいろいろな自然や財産や宝を生かした遊びクリエイターとか遊びコーディネーターのようなことをやってみると、地域の誇りもしくは地域の資源も育成することになると思います。ただの遊びコーディネーターではなくてですね。それが成功すれば、そこに外のお客さんも来てくれることになると思います。

一例として、どこにでもあるといえばあるんでしょうけれども、水俣川の上のほうから、車のタイヤに乗って川下りをするということを聞きました。地元の特別な人しか知らないらしいのですが、今の子たちだと思いつかないけれども、水俣の自然を知り尽くした人だからこそ知っている遊びがあって、それは、やったことのある世代の人に聞かないとわからないらしいですね。そういう水俣の特性を生かした遊びを見つけ、その遊びを通じて地域をつくり誇りを開発するというのもおもしろいかと思います。

【永松座長】 ありがとうございます。

残り時間が大分少なくなってきたのですが、私は、魅力があるのはポイント制ですね。楽天カードもそうですが、ためたからどうということはないんですけども、ポイントがたまったら何かに使えること自体がかなり……。健康関係でもいいんですけども、活動するとカードできちんとたまっていることがあるという、単純なんですけれども、そういう動機づけのようなものも必要かと思います。

最後に一言という委員の方、おられますか。

【藤本委員】 まさに私が今、市内で活動しながら思うのは、先ほどのマッチングサポーターのように、主だって動くリーダーをどう見つけられるかという点がキーだということです。前回のいろいろな話の中でも少し申しましたが、地元の方には諦め感のようなものもありますが、でも、子供たちのために役立つこと、大切なものを伝えていこうという高齢者の方々がたくさんおられます。また、子供たちにしても、新しい発見をして水俣をもっと好きになる、そういうことが大事なので、それらコーディネートもしくはアテンドして下さるサポーターをどう育成していくか、発見していくかというところが、すごく大事だと思います。

【永松座長】 そこが、先ほど言われたような動機づけといいでしょうか、生きがいというか趣味でもいいのですが、そう思ってくれるような仕掛けをどう考えるかということだと思えますよね。時間が迫ってきましたが、確かに非常に大きなことで、そこで何かアイデアが出ると、それ自体が一つの水俣の特徴というか、水俣モデルになると思いますので、それに関しては皆さんもアンテナを張っていただきたいと思います。

深水委員から何かご意見はございませんでしょうか。

【深水委員】 ありません。65歳で高齢者なのでしょうか。

【永松座長】 それは以前にも出た議論でございまして。

【深水委員】 さっき高齢者に生きがいを求めなくていいと言われて、それは90の方に生きがいを求める必要はないかもしれませんが、今や80はばりばりです。お元気です。

【永松座長】 高齢者とか大人とか、その説明も必要だろうという。

【深水委員】 だから、高齢者にも十分、社会的貢献を求めていると思います。

【永松座長】 なるほど。社会的にまだまだ現役だと。

【深水委員】 はい、まだまだ頑張れと。

【永松座長】 確かに高齢者の幅が広過ぎるんですよね。

【深水委員】 そうですね。

【永松座長】 昔、平均年齢70ぐらいのときに65歳を高齢者にしたので、今の80歳ぐらいのイメージなんですね。

【望月所長】 わざわざ後期というのを作り出して、前期と後期という形にしてですね。

【永松座長】 また延びるので、そのうち末期とかいうのがまた。(笑) 後期高齢者も失

礼な表現なんですけれども……。わかりました。子供と親と高齢者について、ここは確かに今の法律の区分けみたいになっていますが、あえてそこまで明確に説明する必要があるのかというご意見だとは思いますが。それはまた次回の委員会のときに意見交換をさせていただきたいと思います。

【望月所長】 これは、ある程度の割り切りという形ではあるんです。おおよそのイメージというか、そういうものであって、何が何でもという感じではないんですね。大体これぐらいの年代なんですよというイメージがつけられたらということで、一応、用語の定義を持ってきたということです。そこをぎりぎり議論しても、なかなか難しいところがあるかと思えます。

【岩橋室長】 私のほうから補足しますと、実際に市民の方から出たご意見なのですが、特にリタイアした後の男性は、仕事をやめてしまうと後がなかなかないので、その方のご意見としては、リタイアした後も活躍できるような場をと。そこで、60歳ぐらいで分ける方法と65歳ぐらいで分ける方法とあるのかなと思ひまして、今回は、65歳ぐらいまでは多分仕事をするだろうからということで、おおむね65歳で区分けをしたという経緯があります。

【藤本委員】 サラリーマンで企業や公的職業等に勤めていると、60歳、65歳というのがステージの区切りになるのかもしれないのですが、私の実家は長年小売業をしていましたし、深水先生のところも病院をされていて、そういう方々は、最後まで現役だと思っでらっしゃる方も多いと思います。農業や漁業ですとか。水俣にはそういった方々もたくさんいらっしゃるの、議論の中ではこういう（高齢者・大人・子どもなどの）区分けがあったとしても、市民に表現するときには言葉を少し考えたほうがいいのかなという気がします。

【石原委員】 半分冗談なのですが、先生の話のを伺って思ったのが、水俣モデルでは、高齢者の定義を90歳以上とするとか80歳以上にするとか。あとは高齢者申請制度。高齢者と呼ばれるのは自分で登録した人だけだとか。もう一つ、呼び方を変える。高齢者と呼ばずに、人生マイスター期とか、そういうのももしかしたらおもしろいかもしれません。

【永松座長】 高齢者というのは名称が何か……。

【石原委員】 そうですね。人生の達人とかでしょうか。

【永松座長】 別の議論になりましたけれども、言われたように、自分が現役でやりたいときは、そういうことでもいいですよ。例えば、高齢者の方で車の運転などが危なく

なったなと思ったときに水俣では高齢者と呼ぶようにしましょうとか、一つの遊び——遊びというもおかしいのですが、心の豊かさというか、そういう味のある取り組みも考えていい気がします。

ありがとうございました。時間を過ぎましたけれども、次回は専ら具体的な施策のアイデア、特に水俣でも可能なアイデアについて、皆様のご意見をたくさん頂戴したいと思いますので、時間があるときにそれぞれお考えいただければ幸いです。

では、事務局へ譲ります。

【岩橋室長】 それでは、次回、第6回の研究会は、9月25日日曜日14時から16時まで、この場所で開催する予定です。議題は、今、座長からありましたとおり、ビジョンを実現する手段として施策に入っていきます、もう一つ、研究会報告書の作成を目指しまして、その骨子案も出していきたいと思えます。

それでは、以上をもちまして本日の会合を閉会いたします。本日はご多忙のところお集まりいただき、まことにありがとうございました。

— 了 —